

ロシアン 短編  
ルーレット



ロシアン  
ルーレット

---

中山俊文

## 目次

	ロシアンルーレット	
一	ロシアンルーレット	1
二	自殺の理由①	17
三	自殺の理由②	32
四	自殺の理由③	42

五	自殺の理由④	45
六	自殺の理由⑤	50
七	他殺と事故の可能性	59
八	突飛な発想をする喬	68
	編者あとがき	81

# ロシアンルーレット

作 山中與隆

## 一 ロシアンルーレット

喬は毎日の日課としているウォーキングで、その日も国道沿いの歩道を歩いていた。そこの歩道は広

くて歩きやすいので、その広い歩道が続いている範囲のおよそ五百メートルを七往復して、全部で七キロ歩くことにしている。これだけ歩くと万歩計で一萬歩を越えるのである。自宅のマンションからその歩道までの距離は、片道約一キロあるが、途中に信号が多かったりするので計算外にしている。

喬はこの日課を二年以上続けている。雨の日や出かけた日以外はほとんど毎日である。妻の洋子と一

緒に歩く日も多い。彼は歩くことが嫌いではない。そして歩くことによつて明らかに体調が良いことを自覚しているのだつた。

定年後の生活を送っている彼は、毎日の生活にこれと言つた義務が無い。だからと言つてごろごろしているのと体調がよくない。出かけるときは億劫なこともあるが、歩き始めると、必ず歩いて良かったと思う。歩いた後、余計なことに時間を使つてしまつ

たなどと後悔したことは、これまでに一度も無い。

この日も喬は調子よく歩いていた。一時間少々決まった道を行ったり来たりするのは退屈である。喬は小説を書いているいろいな懸賞に応募している。退屈な時間にその草を練ろうとすることがよくあるが、歩いているときは意外に考え事が出来ない。

ベートーヴェンが森の小道を、手を後ろ手に組んで散歩している絵を見たことがあると思うが、その



絵には

「作曲の構想を練るベートーヴェン」

と言う意味の説明も付いている。ベートーヴェンのようにゆっくり歩けばいいのかも知れない。しかし健康ウォーキングをしている喬は、結構速足で歩く。一キロを何分かかるかを計りながら歩くことが多い。いつも時速にすると六キロから七キロの間くらいで歩いている。

マラソンでもあと何キロかとか、今の一キロをどれくらいのパースで走ったかと言うことを考えるくらいで、もちろん専門家は競技の駆け引きもあるだろうが、日ごろの暮らしのことや、いま故郷の母親はどうしているだろうかなどということとは考えない。速足で歩くときもこれに近い。小説の展開を考えようとしても、結局は今度の折り返しが何周目かとか、向こうから犬を連れて人が来るから端のほうを歩こ

うとか、綺麗な人が歩いて来たなと思うくらいが、頭を使う全てである。

もつとも頭を使うとは言えないが、ひっきりなしに国道を走ってくる車のナンバーを読むことはよくしている。喬は車を運転しているときに、出合った車のナンバーの二文字ずつの大きい方から小さい方を引き算して頭の体操をすることがある。例えば28と46だったら、

「46引く28は18」

と言う具合だ。あるいは四文字をばらばらに、あらゆる運算式を使って10になる方法を考えたりする。必ず四文字全てを一回だけ使う。前の28と46を例にすると、 $2 \times 4 + (8 - 6) \parallel 10$ となる。余談だが、これは喬が発明したゲームではなく、広く行われているゲームらしい。それによると同じ10を作るのに使用する運算は出来るだけ平易な方が点数は高

い。つまり足し算引き算だけ使って10にするのは、掛け算割り算が混じったものより上位ということである。さらに四文字のどれかを指数として使うことやその他何を使っても良いが加減乗除よりも複雑な計算式を使うとゲームの点数は低くなる。長々と説明したが、これは速足歩きのときには頭を使いすぎるので向かない。従って速歩きのときには、走ってくる車のナンバーを読んで、自分の誕生日、喬の場

合十二月二十三日の12と23があると

「良し」

としたり、

「良い車だ」

と思ったりするくらいのことである。それ以外では、たまたまある車のナンバーが例えば28と98だったから、28か98が付いた車が次に走って来るかどうかだけを見つけることもときどきする。

この日喬はその28と98にこだわってみた。28か98と云うどちらかの二桁が付いた車は案外何台も走ってくる。喬は歩きのノルマの終わりころに、

「もう一台来い」

と願った。もう一台あつたら

「運が良い」

と決めたのだつた。そして

「もし無かつたら、自殺する」

と口の中でつぶやいてみた。もちろん自殺などと言つてもたいした意味は無いし、本気でもない。まもなく28を付けた車が通って行った。喬は

「自殺を免れた」

と安心した。ところが、すぐに98が来た。喬は

「これはいかん、前のが打ち消されたから、もう一台見つからないと自殺だ」

と勝手に決めた。それからしばらくは来なかった。



「これでは自殺だ。来てくれ」と喬は願った。

来た。98だ。喬はホッと胸をなでおろした。自分のマンションに着くまでもう来ないでくれと願ったが、28が来てしまった。マンションはだんだん近づく。もう一台28か98のどちらかを付けた車が来なければ自殺しなければならぬ。つまりロシアンルーレットで、弾丸が入っているとところで引き金を引こ

うとしている状態だ。

マンションの方に向かう市道に入った。国道ほどでないがこの道もかなり車は通る。すぐに28が来た。このままマンションに着くまで来ないでくれと喬は願ったが、直ぐにまた28が来てしまった。そのあと28も98も来ないまま、マンションへの路地に入った。願いどおりの番号が来るまで路地に入らないで立ち止まって見張っているのはルール違反だ。そんなル

ールがどこかに存在するわけではないが、何となくルール違反のような感じがするではないか。喬はフエアプレイの精神で躊躇せず路地に入った。

もう車はたまにしか通らない。そしてついにマンションの敷地内に入ってしまった。喬はマンションの敷地内の駐車場に停まっている車の番号を見回したが28も98も無かった。喬はエレベーターに乗って九階のボタンを押した。もう自殺するほか無い。九

階でエレベーターの扉が開いた。喬はまっすぐに廊下の手すりに向かって進むと、そのまま手すりを乗り越えるようによじ登った。

「冗談はここまで」

と思つて廊下側に降りようとしたちようどそのとき、一匹の大きな蜂が喬の顔の方に勢いよく飛んできた。喬はそれを躲そうとして顔を外側に傾けた。その瞬間、バランスを失い掴まっていた手が滑つて真つ逆

さまに転落、真下のアスファルトに身体を打ちつけた。即死であつた。

## 二 自殺の理由①

喬がマンションから駐車場に転落したことを妻の洋子に知らせたのは、たまたま近所に買い物に出かけようとしていた階下の主婦であつた。その主婦は

背後でドサツと大きな音がしたので振り返ると、人が倒れているので驚いた。彼女は喬たちが夫婦連れ立って歩きに出かけたり、楽器を持って出かけたりするところをよく見かけていたので、倒れているのが直ぐに九階の部屋の主人だということがわかった。彼女は直ぐに倒れている喬のところへ駆け寄ったが、頭の辺りから夥しい血が流れているのを見て、それより近づけなくなつた。そして大声で、

「大變でーす、誰か来てくださーい」

と叫んだ。その声は二階くらいまで聞こえたらしく、たちまち何人もの人が集まってきた。誰の目にも、倒れている状態から、喬が高階から転落したことは明らかだ。喬が九階の住人であることは多くの者が知っていたので、九階から転落したのだらうと、皆は思った。

最初に見つけた主婦がエレベーターで九階に急ぎ、

一階の人が救急車を呼んだ。喬の頭の周りには大量の血が広がっていく。集まった人たちは、喬はすでに絶命していると思った。ただ遠巻きにしてひそひそ話をしながら、救急車の到着を待った。あるものは高階を見上げて恐ろしそうに身震いをした。喬が倒れているのは、ちやうど一台分車が出かけて空いた場所で、もしそこに車があつたら、喬はその上に落ちていたところであつた。



救急車が着いたのと妻の洋子が、知らせに行つた主婦に付き添われて現場に来たのは同時くらいであつた。洋子はうつ伏せでやや顔を横に向けた状態で倒れている喬に取りすがろうとしたが、夥しい血を見て、背中と肩に手を当てた。汗で濡れたティーンヤツはひんやりしていたが、体温はまだ感じられた。そして喬の体が藁人形のようにグニヤグニヤになつてゐるように感じられた。

救急隊が担架を持ってきた。洋子は周りの人に支えられるようにして喬から引き離された。喬の体は担架に乗せられ、救急車に運ばれた。そうしているうちにパトカーも二台来た。救急車を呼んだときに、マンションの転落事故と通報したため、消防署から警察にも連絡されていたのだ。

洋子は、目の前で起きていることを飲み込めないまま、救急車に同乗して病院まで行った。しかし、

病院に着く前に救急隊員から絶望的であることを聞かされ、病院に着いたらすぐに死亡が確認された。

救急車についてきたパトカーの警察官が、死因は明らかだが他に外傷などが無いか調べるために司法解剖する許可を求めた。洋子は何も考える余裕もななく了承した。

喬の死は、変死として警察にいろいろ訊かれた。

まず第一に自殺が考えられると言われたが、洋子には喬の自殺の理由が直ぐには思い当たらなかつた。

警察は事故の可能性もあるとは言つたが、転落したと見られる廊下は間違つて転落するような構造にはなつていないし、手すりの上にあがつて何かをすめる必要性も常識的には考えられない。もつとも喬が何階から転落したのかもはっきりはしてゐなかつたが、解剖の結果から相当高い階からの転落だと判断

された。

洋子は他殺の可能性だつてあるのではないかと警察に言った。警察は一応その線も考慮するが、自殺の可能性の方が高いので、理由になりそうなことを思い出してくれと言う。遺書のようなものがどこかに無いか探すようにも言われた。

言われるまでも無く、洋子も自殺かもしれないと思つている。ただなぜ今自殺しなければならぬの

か、洋子にはその理由がまったく思い当たらなかつた。

夕方五時ごろ喬がウォーキングに出かけたときは上機嫌だった。年寄りには水分補給が大事と言いながら、冷やした麦茶をカップに二杯飲み、ビスケットを三枚食べた。そのとき明日の練習の内容を確認していた。喬と洋子は二人とも地元の市民オーケスト

ラに入っていて、明日はその練習日である。明日練習することになっている曲を喬はかなりさらってあるから大丈夫だと言った。喬はチェロ、洋子はバイオリンをしている。洋子の方は自分のパートは難しいから、喬が歩いている時間に個人練習すると言つてこの日は一緒に歩かなかつた。

洋子は、まさか自分がウォーキングに付き合わなかつたことが原因で、喬が自殺するとは思えなかつ

た。

洋子も喬も若いときに比べると練習が捗らないことは自覚していた。喬は

「こんな簡単なことがなかなか出来ない」と苛々しながら、上手くいかない箇所を繰り返しさうことがよくある。そんなとき、

「引退も遠くないな」

などと口にすることはある。



二人とも若いときから生活の一部のように音楽を趣味としてきた。その練習に年齢的な限界を感じて自殺を考えたと言うことがあるだろうか。確かに若いときのように練習したことが身についていかな。しかし、そう言いながらも同年代の夫婦で、平均年齢七十才のカルテットを楽しんでいる。二日前にその練習会があつて、ベートーヴェンの崇高なメロディを合奏できる喜びをかみ締め合つてきたばかり

りである。

これまでに、チェロを弾くのがひどく面倒くさくなつたと言つて、何日も楽器に触らないことがあつた。それでもオーケストラや、カルテットの練習会には出かけていた。そもそも練習に対する意欲などというものは、若いときから波があるもので、大いにやる気が出る時期と、逆にまったくやる気が出ない時期とを繰り返してきたのである。

喬と洋子にはもう一つ、従妹のピアニストと続けているピアノ・トリオがあり、半年くらい後に、ホールを借りて発表会をすることになっている。これは三人にとってとても大事な計画で、楽しみにしている。それが喬にとって負担になってストレスが溜まったとも思えない。まだずっと先の話で、その曲目も最終的に決まっていない。アマチュアの遊びの一環に過ぎない発表会にプレッシャーなど、仮にあ

ったとしてもたいしたプレッシャーではない。発表会で思ったような演奏ができなくても、ちよつと悔しがる程度ですむのである。

洋子は、音楽に関して自殺に繋がるようなことは無いと思つた。

### 三 自殺の理由②

むしろそれより可能性があるのはからだの調子が良くなかったのではないかということである。

喬は今年七十三才になる。日ごろ非常に元気にしているが、何かすると疲れるとよく言っている。よく昼寝をする。それは六十八才の洋子も同じようなものである。それでも二週間前に日帰りで九州までドライブして来たばかりである。またつい先日は一泊で、関門海峡の花火を見に行つた。

元気ではあるが、七十過ぎるとそれなりに身体のあちこちに不具合は抱えていた。数え上げると糖尿病の予備軍、逆流性食道炎、胃と大腸のポリープに癌性のものが見つかった、前立腺肥大、軽い狭心症、偏頭痛、そんなところであろうか。いずれも洋子もよく承知しているもので、どれについても医者に相談している。

糖尿病に関しては、最近の検査で血糖値が下がっ

たと言つて喜んでいた。

逆流性食道炎は薬を飲み始めて三年くらいになるが、処方されている薬が効いて、現在はまったく調子が良いと言つていた。サラリーマン時代から悪化し始めて、煎餅一つ食べても焼けるような胸やけを覚え、就寝中に血の混じつたような胃酸を嘔吐したこと何回かあった。しかし前述の薬が劇的に効いて、薬はやめられないがそのかわり、今ではてんぷ

らでもボタモチでもまったく気にしないで食べられるようになった。

ポリープは一昨年と昨年の検査で大腸に幾つもできていて、昨年も今年もそのうちの一つが癌化していることがわかった。しかしどちらにも内視鏡検査で切除できているので、今後毎年一回は検査しようと言うことで心配はしていない。

前立腺肥大は、最初に癌の検査をしたがその心配



はなかつた。いまは前立腺の肥大を抑える薬を飲んで  
いる。一時は頻尿に悩んだ時期があつたが、いま  
は通常の生活にまったく支障がない程度に安定して  
いる。初期に処方された薬で、まったく性欲が無く  
なつたが、そのことを相談したら医者が薬を変えて  
くれて解決した。

狭心症は洋子も喬も持病として抱えていて、貼り  
薬と舌下錠を常時携帯しているが、最近は二人とも

ほとんど使うことが無い。

喬はときどき偏頭痛を訴えていた。半年くらい前に、何日も続くからと言って近所の脳神経外科でMRI検査をした。その結果喬の脳にはまったく異常が無く、その際年齢の割りには脳の萎縮もまったく無いと言う検査結果を得ている。偏頭痛の原因は肩こりだろうということであった。

以上のように洋子は喬の身体については全て認識

をしているつもりである。もう一つ、自殺の理由にはなり得ないと思うが、左足親指の外反母趾で第二指に擦れて歩くとき痛いと言っていた。これも整形外科に相談して、小さなシリコンの装具を指の間につけることで解決した。なにしろ一月前には利尻島一周六十キロを歩きとおしたのだから何の問題も無い。

それ以外に洋子がまったく知らない異常を喬は自

覚していたのだらうか。洋子に心配をかけまいとして言っていないことがあつたのだらうか。もしそうだとしたら洋子にもわからない。しかし、少なくともも日ごろの態度からは、そのようなことで悩んでいゝるような様子は、洋子には思い当たらなかつた。

実はこの健康上の理由を洋子は真つ先に考えたので、司法解剖をするといわれたとき、病理解剖も願ひ出て実施してもらつた。死因は高所からの転落に

よる全身打撲であることは明らかだが、喬の体内に、洋子が知らないような重大な病気があつたのかどうかを知りたかつたのである。解剖に当たつて洋子は担当医に、自分が知っている喬の病気については全て説明した。解剖の結果、洋子が説明したこと以外には特に喬が耐えられないような苦痛を受けていると思われるような病気は確認されなかつた。

健康上の理由も、自殺の理由になりそうにない。

#### 四 自殺の理由③

喬は音楽の趣味に多くの時間を割くかたわら、小説を書いていた。結構頻繁にいろいろな懸賞に応募していた。ほとんど毎月出していたようである。もう数年以上続けているがまったく入選は無かった。しかし最近になって第二次選考に残ったと言う通知が来たり、惜しくも佳作にもれたが、良い作品なの

で自費出版しないかと言われたり、最終選考の候補になつたので二重投稿などが無いかとの確認があつたりした。そしてついに先月市民文芸の佳作に入選したばかりである。生まれて初めて小説で一万五千円の賞金を得たのである。まあ、それだけではあるが最近是非常によく筆が進むようで、長い時間パソコンに向かつていた。入選など無かつたとしても、創作に行き詰つて絶望して自殺したとは、洋子には

思えない。

前述の音楽にしてもこの小説にしても、アマチュアであるが、本人にしてみれば才能に恵まれないと言ふ願望はあつただらう。音楽で言えば、大学時代に音楽の道に進みたいと言つて、学校を辞めて独学で音楽を目指そうとしたことがあつたと言ふ話を、洋子は本人から聞いたことがある。そのとき教授に説得されて、中途退学は思いとどまつたそうだ。し



かし、その後喬は一般の会社に就職し、平取締りとは言え役員にまでなり、定年まで勤め上げたのだから、音楽の道に進めなかったことを悩み続けて、今になって自らの命を絶つたというのは無いだろう。

## 五 自殺の理由④

洋子は自分との関係で喬が思い悩んでいたことは

なかつたか考えてみた。洋子は、自分では気がつかないで喬を苦しめていたと言うことは、あり得ないことではないと思った。自分は喬にとって決して良い妻ではなかつたかも知れない。自分は我がまままで、結構喬に対して我を通してきたような気がする。それを、優しい喬はずっと我慢し続けてきて、ついに我慢の限界に達したか、自分との家庭生活に疲れたか、あるいはそのような生活に魅力を失って、どう

でも良いと思うようになっていたと言うことはないだろうか。洋子は、自分を疑い始めると、どれも当たっているような気がしてしまふのである。

「私なんか、駄目な女房でしょう」

と一度ならず聞いたことがあるが、喬はそのたびに、「ぜんぜんそんなこと無いよ」と言ってくれていた。

それから洋子は、自分が家事をあまりきちんとし

てこなかつたことを考えた。料理も面倒くさがつていい加減なものしか作らず、ちよつとなんかあると外食に頼つてきた。外食が度々なので安いファミレス専門で、選ぶメニューも限られてきて二人とも飽き気味であつた。それでも腹が減つて、作るのも面倒だと出かけることにしてしまつていた。掃除関係はといえは喬の定年後は殆ど喬にまかせていた。食べるものが美味しくないとか、掃除が嫌だとか言う

のでなく、そういった夫婦生活に嫌気が差したということはないだろうか。

そもそも洋子は、自分が太って腹も出ていて女性として魅力がなくなっていることを、喬に対してだけでなく気にしている。当然喬も妻には女性らしい魅力を保っていてもらいたかっただろう。だから街でもきれいな女性がいると、喬はよく見た。ではあるが六十過ぎたら大抵はそれなりの見掛けになるも

のだ。喬だつて頭はすっかり剥げているし、太つてこそいないが、決して颯爽とはしていない。そんなことで自殺することはありえないと洋子は思うのだつた。それは周りの熟年夫婦を見ればわかることである。それでも毎日仲良くやつてきたではないか。

## 六 自殺の理由⑤

洋子は、喬の女性関係も考えてみた。喬は昔から比較的女性には人気があった。何処のオーケストラにいたるときも喬のファンがいたようだ。喬のチェロはアマチュアとしては結構魅力的な音を出していたと思う。それに優しい性格でありながら、発言はしつかりしていて責任感もあった。だからオーケストラでは常に重要な役になっていた。女という者はそのような男には憧れるものである。若くもなく頭が

剥げていても、あまりそう言った外見には関わらず、憧れるものだ。現に洋子自身そのような夫が好きだったし、誇りに思つてもいた。

人気があつたと言つても、それらはオープンな関係であつて不倫などと言つたものではないと洋子は思っている。しかし、洋子が知らない関係が絶対に無かつたとは言ひ切れない。そのような関係の女がいて、何らかの理由でうまく行かなくなつて絶望し



たと言うことはないだろうか。絶対に洋子には言えない問題として思いつめた挙句の自殺。病気の場合と同じで、洋子が知らないことと言う設定であれば、無かったとは言い切れない。

しかし、今自殺しなければならぬような関係が、喬と誰かの間に進行していただろうか。洋子にはまったく思い当たる節は無かった。定年後何年も洋子と喬はほとんどの時間を二人で過ごしてきた。もち

ろん日々の生活の中では、それぞれ別々のことをしていることも多いが、それは家の中でのことである。出かけるときは九十九パーセント一緒であつた。オーケストラやその他の音楽の練習もすべて同じグループに属しているし、ドライブや旅行も一緒に行っている。

たまに洋子が体調が悪かったり、気が向かないと言つて予定していたコンサートに行かなかつたりし

たことがある、喬だけが出かけて行ったことがある。この一年の間に一回か二回であろうか。それ以外で単独行動と言えば近所のスーパーへの買い物くらいである。その限られたチャンスに、深い関係の女と素早く連絡を取り合つて、愛を確かめ合つたり、何か深刻な話をしたり出来るものだろうか。だいたいちようどその時に相手が電話に出たり、話をしたり出来るとは限らないではないか。そもそも喬は自分

の携帯を持ち歩かない。それに相手から我が家に電話がかかってくることも、洋子が知りうる限りではなかったような気がする。だから、自殺するほど深刻な事態に至ることが物理的に可能とはどうしても洋子には考えられなかった。洋子は、少なくとも定年後の十年以上に関しては、そのような特定の女はいないと信じている。

では、定年以前はどのようなのだらう。それについて

は洋子としてはわかりようが無い。親しい女性はいたかも知れないし、いなかっただかも知れない。

喬は無断で外泊したことなどないし、ほとんどは家に帰って夕食をしていた。もちろん出張もあつたし、会社の同僚と呑んで帰ることもあつたが、酒をほとんど呑まない喬はそのような付き合いは稀にしかなかつた。

仮に百歩譲って、現役のときに誰かと関係があつ

たととしても、その後ほとんど交渉がないまま、今になつて自殺するほどの問題が起きると考えられるだろうか。その女が今になつて隠し子の養育費を求めてきたとか、その女が重い病にかかつて余命いくばくも無い事態となつて、それぞれが別々の場所で死んで、天国で会おうと誓い合つたとか。それにしても、先にも言つたようにそんな連絡を取り合うことが出来たか甚だ疑問である。もちろん洋子から見ると

と、喬にそんな隠し事があるようには思えなかつた。

## 七 他殺と事故の可能性

喬の自殺の理由は、洋子としては考えられるあらゆる点からしても思い当たらない。警察も消極的ではあつたが、一応他殺の線も検討すると言つていた。それにしても歩いてゐる最中に通り魔に刺されたと

言うのなら、最近ありえないことではない。しかし自宅マンションの、それも自室の前の廊下からの転落死である。歩いているときに誰かと言い争いになり、喬を追いかけてきてここまで来て追いついた犯人が、喬を投げ落としたのだらうか。そうではなく、変質者が九階に潜んでいて喬がエレベーターから降りたところを突然襲い掛かって投げ落としたのだらうか。いずれも絶対に無いとは言えないが、可能性



はあまり高いとは言えないだろう。

警察は、喬がウォーキングから帰ってきたときの目撃者を見つけてそのときの様子を聞いた。それによると喬がマンシヨンの駐車場に入ってきたとき、駐車場の車を見回していたが、誰かにつけられている様子はなかったと言う証言を得ていた。同じマンシヨンの住人がたまたま車で出かけるときに、汗びっしよりのTEEシャツ姿で帰ってきた喬を見たの

だ。互いに軽く会釈したが、喬はいつものように笑顔で応えたと言う。

また警察はマンションの住人全員に、その時間帯にマンションに入り込んだ不審者を見かけなかったかを聞いて歩いたが、目撃情報は得られなかった。このマンションはオートロック式になっていないので誰でも各部屋の前まで入っていける。一応監視カメラが一階のロビーとエレベーター内にある。警察

はそれもチェックしたと言っているが、不審者と思える人物の出入りは、少なくとも事件当日の午後は確認できなかつたらしい。不審者と言つても、いかにも

「わたしは不審者です」

と言うように目出し帽やサングラスにマスクと言つた格好をしているわけではない。宅配便の人も出入りしているし、各室への客も来る。もちろん縁側を

開け放した田舎の家と違って、マンションは基本的に閉鎖的な構造である。住人は自分の部屋に居る限り、誰がマンションに出入りしているかを監視することはできない。

警察によると、九階の廊下で争ったような跡や、喬と犯人が争ったときに落としたものなども見つからなかった。当日は天気良かったので、足跡なども無かった。つまり警察としては、犯罪の可能性は

無いと断定したらしい。洋子は、警察が自殺を強く疑っているらしいので、何処まで犯罪の可能性を真剣に検討してくれたのか怪しいものだと思った。しかし洋子自身その可能性が低いことは認めざるを得ないとも思っていた。

事故の可能性もあまり考えにくい。例えば廊下の天上に蟬がとまっていたので捕まえようとして手すりに登っていて、間違つて落下したと言うようなこ

とは、馬鹿な子供でもない限り考えられない。洋子は、喬が蟬などにまったく興味を示さないことを知っている。だが、天上や手すりに蜘蛛の巣が付いているのに気が付くと払い除けていた。その場合玄関の横においてある床掃除用の雑巾を挟む棒を使えば、天上には楽に届く。手すりに登るような危ないことをする必要は無い。

手すりから身を乗り出して何かを見ようとしたと

き、乗り出しすぎてバランスを崩した可能性は無い  
か。下の階や上の階の廊下を見ようとする、かな  
り身を乗り出さないと見えない。何か気になる声や  
音が聞こえて見ようとしたのではないか。手すりは  
大人の胸の高さあるので、足を床につけたままでは  
あまり覗き込めない。足を浮かせて身を乗り出した  
のではないか。洋子は、高所恐怖症の喬がそのよう  
な姿勢をとることはありえないと思った。一階の廊

下の手すりなら喬でもできたと思うが、二階以上では無理だと思う。いわんや九階である。高所恐怖症でなくても、そこから真下を見ればゾツとするものである。

## 八 突飛な発想をする喬

洋子は、喬がときどき突飛な発想をすることを思



い出した。若鶏のモモ肉を食べながら、

「巨人国に住んでいたら、奴らは人間の子供を捕まえて、そのモモ肉を旨そうに食うかも知れん」と言ったり、

「人間を養殖して、食材としてスーパーで売っているかも知れん」

と言ったりすることがある。蟻の巣を見て、それを踏み潰しながら、

「人間が蟻くらいに小さく見えるような巨大な生き物に支配されている世界だったら、自分たちもこのように住まいを踏み潰されるんだね」

と言ったりしたこともある。しかしそれらは、戦争や大量殺戮を繰り返す人間を揶揄しようとする喬なりの思想の表れなのである。草刈り鎌で墓地の草を刈りながら、

「戦争なんてこうやって人を殺すようなものだ。草

を刈っているのは為政者や権力者なんだ。戦争ではこの草の数だけ人が死んでいく」と言ったこともある。

死生観についても、

「よほど若い人は、死にそうになったら何とか助けた方がいいが、六十過ぎたら、神の思し召しに素直に従ったほうがいい」

「人間は死ぬように出来ているのだ」

「生まれた瞬間から、死に向かつて行進しているよ  
うなものだ」

などといつも口にしていた。

「特に老人が生にしがみつくのはみつともない」  
と言うのが最近の口癖だった。だからポリープにガ  
ンが見つかったても特に気にする様子も無かった。

「だからと言って自殺なんかする必要は無い。生死  
は神が決めてくれる」

とも言っていた

ひとつつ洋子が気になったのは、九階の手すりから真下を見て、

「下を見てみると、飛び降りてみたくならない？」とか、

「何だか吸い込まれていくような気がしない？」などと何度も聞かれたことがある。本人は、飛び降りたくなるのだらうか。あるいは、高所恐怖症だと

そんな気持ちになるものなのだろうか。

だから喬の突飛な考え方や、死生観から、洋子は衝動的に飛び降りたと言うことはあるかも知れないと考えるようになってきた。

「自殺なんかする必要は無い」

と言う喬の言葉とは矛盾するが、衝動的なものであれば、普段の考えと違ったことをすることだってあり得る。

しかし、実際には洋子が考えたどの理由も違っていたのだ。喬は、車のナンバーを使ってロシアンルーレットのような一人ゲームをして、たまたまそのナンバーの車が来たか来なかったかで、自殺するかしないかを勝手に決めて、自殺する順番になったために九階まで戻ったときに手すりに足をかけた。そこでゲームは終わるはずだったのに、間違つて転落してしまつたと言う、冗談が何かの弾みで意に反し

て転落死してしまった。

洋子は、一緒に車に乗っているときに、車のナンバーでいろいろ計算したりするのは知っていた。洋子自身は関心が沸かなかつたが、喬は結構しばしばやっていた。しかしそのときに、行き交う車のナンバーを使ってロシアンルーレットのようなことを口にするのを聞いたことはなかつた。何故かそれは喬一人のときのやり方だつた。



自殺か、他殺か、事故かの確証が無いまま、警察は自殺として処理することにした。洋子もそれを認めることになった。

たしかに洋子も、他殺や事故の可能性が非常に低いことは認めざるを得ないと思っっている。かといって、さんざん考えてきたように自殺の可能性も究めて低いと言わざるを得ない。

結局、喬は何故死んだのか。洋子はその謎を抱え込んだまま余生を送らなくてはならなくなつた。そして、可能性が低いと思ひながらも、喬が自ら命を絶たなければならぬような理由を、今日も頭の中で反芻し続けるのだつた。

洋子は、五十年近くも連れ添つて、何もかも知つてゐるように思つていた夫でも、いざとなるとわからない部分に突き当たるものと痛感した。喬から

見ても妻である自分のことは、わからないことがある  
ったのだらうと洋子は思った。夫婦なんてそんなもの  
なのだらう。いくら理解しあっていると思つてい  
ても、所詮理解しているのはほんの一部分だけなの  
だ。

葬式に帰つてきた二人の娘とその家族に、思い当  
たることがあるはずだと洋子は追求された。しかし

洋子は、

「わからない」

としか答えられなかった。娘たちは、きつと洋子にはどうしても言えないことがあるのだらうと思いがら帰っていったのだった。

(了)

## 編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きにだけ楽しみな  
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同  
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣  
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。  
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中  
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう  
に文筆を止めてしまっていると思っておりましたの  
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))  
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前について



與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

※2 ペンネーム「中山俊文」について

著者、山中與隆は、過去において「小説家になるう」のサイトに「中山俊文」のペンネームで投稿し

ていた時期がありました。また別場所ではその他のペンネームも使用していたようです。一連の作品の出版開始に当たっては、著者名はデータ管理上一つに統一するべきとのことで「山中與隆」に統一しております。しかし、例外として今回続けて出します五つの短編については、過去におけるウェブ上発表の事例がありますので、本の中では著者名を「中山俊文」とさせていたただいておりますことをここに記

します。

## 著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も  
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた  
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴  
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの  
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら  
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。  
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

## 今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

### 既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた



## 既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

## 三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

## 阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

## 四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットのあゝ風景

「オセロ」の手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

## 紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

## 短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

## 12 カルテット

## 最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか



---

## ロシアンルーレット

---

2022年6月30日 初版発行

著者 山中與隆

編集発行 山中伶子

表紙素材元

みんちりえ( <https://min-chi.material.jp/> )

illustAC

タイトル: 歩く 元気 ウォーキング

作者: ニッキーさん

素材のID: 22717529

©Tomotaka Yamanaka

<https://www.duoyamanka.com>

---